

Abstract

血友病小児群における頭蓋内出血の合併率と発症率

Prevalence and incidence of intracranial haemorrhage in a population of children with haemophilia

M. D. Nelson Jr, M. A. Maeder, D. Usner, W. G. Mitchell, M. J. Fenstermacher, D. A. Wilson, et al.

我々が観察した血友病患者群における頭蓋内出血 [intracranial haemorrhage (ICH)] の合併率は12%であった。ICH発症率は年間約2%である。観察開始時に施行されたMRI (磁気共鳴映像法) では、7%の患者 (309例中21例) でICHの既往があったにも関わらず、陳旧性出血は認められなかった。これは次の3つの可能性を示唆している：①出血が完全

に消退した、②通常のMRIは古い血液産物を検出するには感度が低い、③両要因が重なっている。観察開始時のMRIでICHが認められた患者のうち半数 (8例中4例) が臨床的に無症状であったことに加え、その後のMRIでICHが確認された11例中の3例でも臨床症状はみられなかった。また、HIV感染はICHリスクの増大にはつながらなかった。

Haemophilia (1999), 5, 306–312
© Blackwell Science Ltd.

Abstract: R. L. Bohn, et al.

Abstract

確率、費用、および成果：血友病治療モデル作成の方法論に関する問題点

Probabilities, costs, and outcomes: methodological issues in modelling haemophilia treatment

R. L. Bohn, A. B. Colowick and J. Avorn

これまでのところ、血友病治療の経済的分析は数少ないが、様々な治療方式の費用と成果を評価するために次第に頻繁に用いられるようになってきた。経済分析モデルの作成では、確率とコストの配分が難点といえよう。また、血友病患者のQOLを測定す

る新しい手法の開発や導入については今後さらに研究されなければならない。血友病治療の経済的側面に関する研究を拡大・促進するためには、これらの方法論に関する問題点が提起される必要がある。

Haemophilia (1999), 5, 374–377
© Blackwell Science Ltd.